

# 医学分野における学会発表の分析

## -Pharmacovigilance の観点を含めて-

平山陽菜

一般財団法人 日本医薬情報センター附属図書館

会議資料；学会発表；灰色文献；Pharmacovigilance；学術情報流通

### 1. 研究の背景と目的

研究者の学会発表を記録する抄録集は、学術情報流通において速報性が高い一次資料である。さらに、“医薬品、医薬部外品、化粧品及び医療機器の製造販売後安全管理の基準に関する省令(GVP 省令)” 第7条2項より、製薬企業は市販後医薬品の安全性調査のため学術論文だけでなく学会報告も収集しなければならないことが定められている。このように、抄録集は社会において重要な情報資源であるが、その多くは灰色文献であるため網羅的・継続的な収集は困難であり、ゆえに学会発表の実態を知ることも容易ではない。

資料収集、及び Pharmacovigilance の実施において、学術行動としての学会発表の特性を理解する必要があるだろう。そこで本研究では、特に医学分野において、近年の学会発表の演題数を分析し、学会発表の特徴や傾向を明らかにする。また、医薬品に係る演題数（本研究では、日本医薬情報センターが医薬品に係る記述があると採択を行った演題数を指す）に着目することにより、Pharmacovigilance との関係性にも言及する。

### 2. 研究の方法

本研究では日本医学会分科会全 118 学会のうち、医薬品に係る学会発表が行われる 110 学会を対象とした。分析を行うのは対象学会が開催した 2013 年度、及び 2002 年から 2013 年の 12 年間の学会発表の演題数である。なお、学会は地方会や講演会など様々な会議を開催するが、本研究では全国規模かつ年間で最も演題数の多い 1 会議を対象とした。また、演題数は日本医薬情報センターで収集した抄録集によるため、抄録集が入手できなかった会議を除くと、結果的に 2013 年度の演題数の分析対象は 106 学会、12 年間の演題数の分析対象は 77 学会となった。

### 3. 結果

2013 年度の平均演題数を社会・基礎・臨床医学の分野別にみると、社会医学が 488 演題、基礎医学が 705 演題であるのに対し、臨床医学が 1,103 演題であり、臨床医学分野の学会発表の規模が最も大きい。また、10 年間の経年変化では、総演題数及び医薬品関連演題数が共に増加傾向であることが示された。具体的には、2002 年の総演題数（平均）が 714 演題であるのに対し、2013 年は 1,076 演題と 1.5 倍に増加している。さらに、医薬品関連演題数（平均）は 2002 年が 164 演題であるのに対し、2013 年は 1.8 倍の 289 演題と増加しており、総演題数に占める割合も 23.0%から 26.9%と微増した。